

港区立麻布小学校「ふれあい月間（6月）」におけるいじめ防止の授業報告

港区立麻布小学校

人権教育担当

「ふれあい月間」は、東京都教育委員会が毎年6月・11月・2月に設定している、いじめや不登校の防止・早期発見・早期対応を集中して行う期間です。この期間、麻布小学校では、例月のアンケート調査に加えて、各学年、各クラスでいじめ防止のための授業を行うことにしています。

お子様を、いじめの被害者にも加害者にもさせないための本校の取り組みをご紹介します。

第1学年 「ルンルン わるくないもん」（道徳）

低学年の児童が興味をもちやすい動画教材、「ざわざわえんのがんぺーちゃん」シリーズの物語です。仲良し3人組が、珍しいぶどうをとりにやってくるのですが、突然一人の子が、「とっちゃだめ！」と言い出したことで、心にすれちがいが起こり、それが「仲間外れ」という行為に発展していきます。

登場人物の言動を通して、「どうすればよかったのだろう」ということを、教師と一緒に考えました。

「ごめんねっていえばよかったのにね。」
「ねっくれすがこわれたときに、ふたりとも
ごめんねってあやまればよかったとおもう。」
「みているひとがとめるとよかった。」
「けんかにならないようにやさしいいかたを
すればよかった。」
「いちどあいてをしんじていうとおりにして
みたらいいかも。」



児童たちは、相手の気持ちを考えて行動することや、悪いと思ったらきちんと謝るということが大切だと自分の考えを発表していました。

第2学年 「ルンルン わるくないもん」（道徳）

1年生と同じ動画教材です。今回の授業では、物語について話し合いながら、友達との関わりを振り返り、「相手の気持ちに共感する」「相手の立場に立って考える」などの思いやりの心情を育ぶことをねらいとしました。

前半では、登場人物の二人が、ぶどうが入ったかごを引っ張り合い、集めたぶどうが地面に落ちてしまったときの気持ちを、登場人物になりきって考えました。その後、自分自身の生活を振り返りながら、自分だったらどのように行動していきたいかについて考えました。

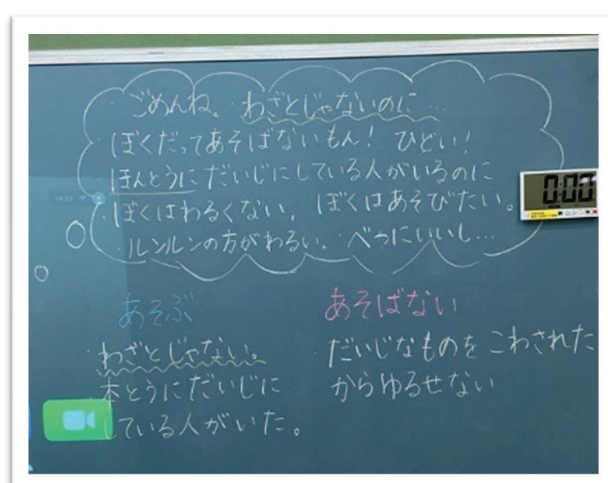
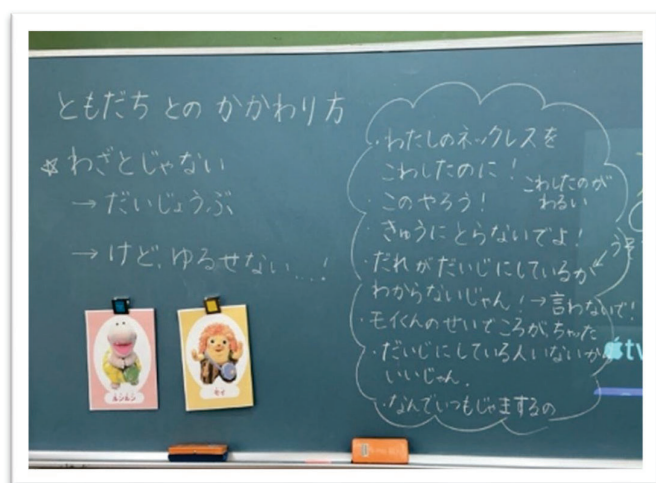
以下、児童たちの振り返りをいくつか紹介します。

「相手の気持ちをあまり考えていなかったの、これからは相手の気持ちを考えて生活をしていきたいです。」

「自分が平気なことでも、相手は嫌かもしれないと考えてから話したいと思いました。」

「自分の気持ちと友達の気持ちが違うことがある。知らなかったら、自分のことしか考えていないってことになるんだなと思いました。」

「ともだちがわざとではないかどうかをしたら、ゆるしてあげることがだいじだと思いました。」



第3学年 「しんぱんは自分たちで」(道徳)

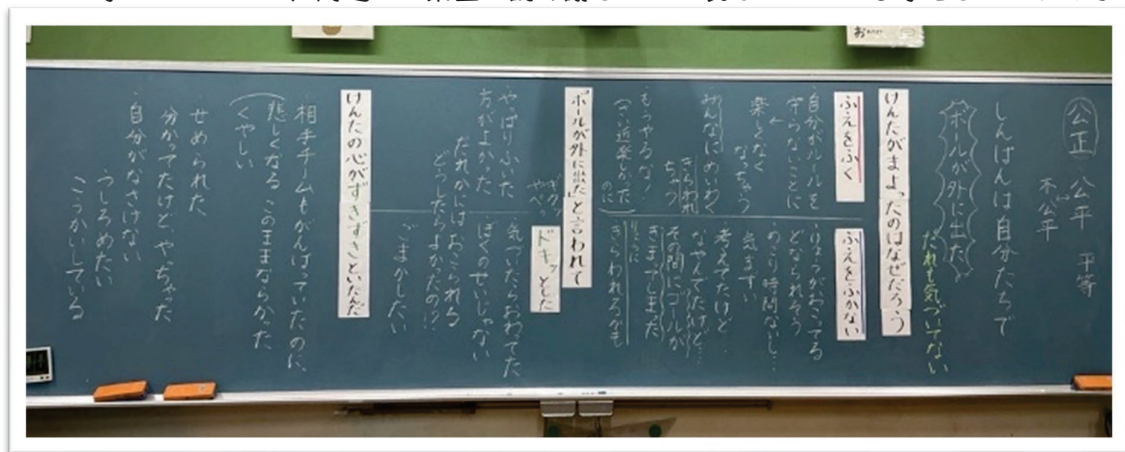
物語の主人公は、体育のサッカーの時間に審判を務めていた けんた です。りょうの蹴ったボールがコートの外に出たことに気が付きますが、けんたは、りょうと仲良しということもあり、笛を吹くことができませんでした。

本授業では、「誰に対しても、公正、公平な態度で接することの大切さに気づき、進んで正義を実現しようとする態度を養う」ことをねらいとしました。

授業の前半では、審判を務めていた けんた の気持ちを想像しました。「りょうが蹴ったボールが線を越えたのに、笛を吹くのを迷ったのはどんな気持ちからか」また、「その後、けんたの心がずきずきと痛みはじめたのはどうしてか」

児童たちは、主人公の葛藤に共感しつつも、審判としては、「自信をもって行動する」「ルールを大切にすること」「相手の立場に立って考える」ことが大切だと意見を述べていました。

最後に、「もし、自分が けんた だったらどうする？」という問いに対しては、「間違っただけを素直に認め、謝る」という意見が出て、多くの児童が共感していました。公正・公平であることの大切さについて考えるとともに、間違いを素直に認め謝ることの良さについても考えることができました。



物語の主人公は、目の不自由な男の人が横断歩道を渡れない様子に気付いた「ぼく」です。初め、「ぼく」は、知らない人に声をかけることへの不安や緊張をもちますが、やがてそれらを乗り越えて、目の不自由な男の人に声をかけることができました。

学習は、話し合いを中心に進めました。

- 最後に、「親切の輪を広げるために大切なことはなんだろう」と班で話し合いました。

各班の発表では、「困っている人がいたら声をかけていきたい」「相手のことを考えた



り、思ったりすることが大切」「自分が周りの人に優しくしていれば、優しくされた人も周りの人に優しくすると思う。それで、親切の輪が広がっていく」といった意見が出ていました。

第5学年 「いじめをなくすために」(道徳)

授業のねらいは、差別することや偏見をもつことが間違っていることについて改めて理解し、誰に対しても公正・公平な態度で接しようとする心情を育てることです。

はじめに、2枚のイラストを児童に提示しました。

1枚目は「一緒に帰ろう」と誘ってきた友達に対し、一人には好意的に接し、もう一人には無視して帰ってしまう、という場面のイラスト。

2枚目は公園で遊んでいた際に一人の子がボールをフェンスの外に出してしまい、その件と関係のない子に対して「ボールを拾ってこい」と命令するイラストです。

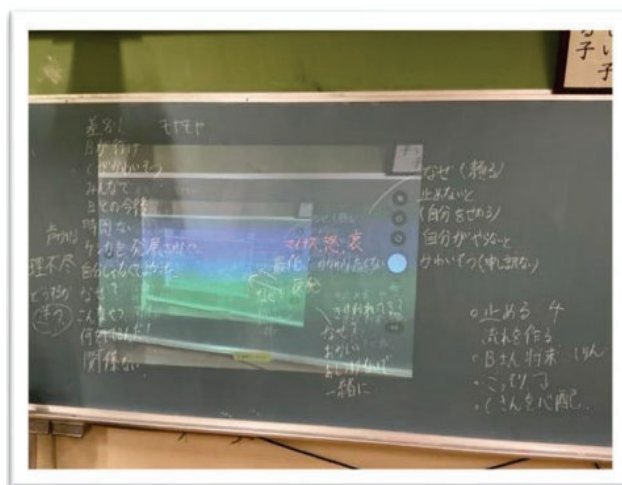
子供たちの意見を聞くと、どちらのイラストに対しても「被害者」の思いに寄り添うもの、「加害者」の言動に対する憤りに集中しました。

そこで本文「宮本亜門さんと増田明美さんの体験談」を読みました。そこには、実際に行爲を行った相手より、周囲で見ていた「第三者」についての当時の思いが紹介されていました。そこで子供たちに「このような場面に遭遇した時に周囲へは何ができるのか」を考えさせました。

そこでは

- ・行爲を止めたり、先生に相談したりする。
- ・被害者に対して優しい言葉をかけるなど、フォローする。
- ・そういう状況にならないように弱い立場の人を守る。

等の意見が出され、一人一人が、自分事として捉えつつ、どのように行動するべきか考えることができました。



第6学年 「友達だからこそ なやむこと」(道徳)

授業のねらいは、「よりよい人間関係を築くために大切なことに気づき、相手の気持ちや立場を想像しながら、互いに信頼しあい、友情を深めようとする心情を深める」ことです。

学習では、友達との間で起こりそうなトラブルや不安、悩みなどについてさまざまな事例を考えながら、人それぞれ考え方が違うことを理解しながら、友達関係について考えました。

身近な事例や今まで経験したことがあろう事例について考えることで、「自分も同じ気持ちになった」「自分も同じ行動をしてしまうかもしれない」など、自分事として考える児童の姿が見られました。

また、その中で、人それぞれの考え方や感じ方があることに気付き、友達との関わり方について改めて考える様子が見られました。

授業の終末では、「相手の気持ちを考えて行動したい」「自分の考えを伝えるだけでなく、相手の話もよく聞きたい」といった発言もあり、よりよい人間関係を築くために大切なことについて理解を深める機会となりました。